

# 國學院大學學術情報リポジトリ

日本語非母語話者の会話におけるポライトネス：  
日本語母語話者とブラジル人の日本語会話の対照研究：  
特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上甲, アリセ, Joko, Alice Tamie メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000422">https://doi.org/10.57529/00000422</a>

# 日本語非母語話者の会話における ポライトネス

## —日本語母語話者とブラジル人の日本語会話の 対照研究—

上甲アリセ

### 1. はじめに

ブラジル人日本語学習者が日本に留学して、日本人と会話をしているとき、話しがスムーズに展開しないで、相手に良い印象を与えることができなく、その結果、良好な対人関係を築くことができなかつたという体験が往々にして聞かれる。反面、そのような学習者も日本に長期滞在し、日本語が流暢に話せるようになると日本人とのコミュニケーションにおいても意思疎通が図れるようになることも報告されている。これは、学習者が日本人との接触場面において日本語の会話スタイルの規則性を把握していれば、相手が予期している対応ができるようになり、お互いに緊張を強いられることもなく、好意的人間関係の創出・維持が期待できることを示唆している。

本研究の課題は日本語を媒介語とした学習者の会話を日本語母語話者の会話と比較することによってそれぞれのコミュニケーションスタイルの特徴を明らかにし、非母語話者にとって円滑な相互行為の障害となる要素の解明を試みるものである。

21世紀の日本語教育研究に期待されるのは言語そのものの習得ではなく総合的日本語教育であるといわれている。総合的日本語教育とは「人間の言語生活において実際に認知されるままの総体的言語 (whole language) として日本語を捉えて学習させるということである。[...] 言語運用の際の統合性を生かし、ありのままの言語として学習させるという原則を基底に据えているのである。」(李 2002: 11)

総合的日本語教育を実践するには、従来の文法指導とともに相互行為としての会話教育を取り入れたシラバスの設定も重要な課題である。

日本語の会話に関する先行研究は数多くあるが、ブラジル人による日本語の会話を分析し、母語話者の会話スタイルとの差異を説明する試みに関する研究は報告されていない。言語が社会状況の徴候であるなら、それぞれの社会はそれぞれ状況に見合った言語形式を有することになる。東アジアと南アメリカ、地理的にも遠く離れ、社会構造や価値観や公用言語の異なる学習者のコミュニケーションに現れる（イン）ポライトネスを母語話者のそれと比較することによって、その差異を明確にすることは、日本語教育という言語学の分野にとっても意義あることと考える。

## 2. 本研究の枠組み

佐々木 (1994: 253) は「対面コミュニケーションの理想は、内容表現が十分なされると同時に、態度の表現も過不なくなされ、参加者間の好意的人間関係の確立に成功するものであろう。好意的人間関係の確立とは、言い替えれば、参加者間にラポールが生じることである。」と述べている。ラポール (rapport) (以下ラポール) は心理学で、人と人との間が和やかな心の通った状態であること、親密な信頼関係にあることを指す。言語学ではスペンサー・オーティー (2004) が調和の取れた社会関係を促進し、維持し、また脅かすものでもある言語の使用を中心課題とし、これを「ポライトネス」ではなくて、「ラポール」と呼ぶことを提唱している。

内容表現・態度の表現とは Brown & Yule (1983: 1) が言語の機能を二分方で大別したもので、情報伝達、the transactional が内容表現、社会関係維持の機能、the interactional が態度の表現にあたる。また内容表現・態度の表現は松山 (1990) の「伝える言語」「表す言語」に当てはまると考える。松山 (1990: 40) は言語に「伝える」と「表す」という二つの柱を立て伝達は情報の伝達・状況の伝達、表現は感情の表現・情緒の表現のように用いられること、さらに「もともと、「伝達」という言葉は、ある事柄や状況、事態、考え方など、客観的なものとして認識したことが、その伝達内容として考えられるのに対し、「表現」という言葉は、内面的な心情にかかわるものがその対象として考えられているのである」(同: 26) と説明している。

松山はさらに同論文で、それが異文化接触に関して書かれたものではないにもかかわらず、異文化接触におけるコミュニケーションを考える際に、きわめて重要な指摘をしているため、以下に引用する。

表現内容を言語化するさい、十分に言語表現できないときは、すでに表そうとしている内容が言語化されないのであるから、十分な伝達が行われない。この段階は、きわめて重要なところで、このために多くの送りは苦心をす

るのである。(同: 39-40)

ところで、言語体系は、送り手と受け手とともに、社会的習慣として共通にもっているように思われるが、厳密にいうと、送り手の持つ言語体系と受け手の持つ言語体系が一致することはない。そこには内容的に、あるいは量的、質的に若干のずれがあることが考えられる。また、それら送り手・受け手のもつ個人的な言語体系と、社会的言語体系（これがいわゆる社会的習慣ととしての言語体系）とが考えられる。かの考え方からみると、この個人的言語体系の内容が大きく違う場合は、十分な伝達がされにくくなる。

[...]

送り手と受け手の経験領域の差も、正確な伝達を妨げる要素となる。経験領域が異なると、メッセージ（記号）が異なって誤解されるおそれがあるからである。

さらに重要なことは、送り手が、受け手、および受け手を含めた場面を受け手と共通に理解内容としてもっているかどうかということがある。共通の理解がないとき、送り手の親しみの表現が受け手に侮辱と受け取られたり、冗談の表現が憎しみの表現と受け取られたりする。

松山は「個人的言語体系」と「経験領域」の共通理解の差は正確な伝達を妨げる要素となりうると主張するが、日本語母語話者と非母語話者のコミュニケーションの難しさはまさにここに起因すると考えられる。

上記を踏まえたうえで、本研究は「ポライトネスには言語形式のみではなく、言語形式と発話される状況、話し手と聞き手の関係が加わったものが必要なのだ（トマス 1998）」という立場を取る。このような視点のもとに行われるポライトネス分析は、当然受け手を含めた「場面」が重要な要素となる。発話の送り手がどんな状況のもとに、何をどういう方法で伝えようとしたのか、またそれを受けた相手はどんな反応を示したのかなどを解明するには、発話の前後の文脈が把握可能である会話分析が有効な手段であることから、分析にあたり、その手法を採用した。

## 2.1 ポライトネスの概念

ポライトネス研究とは、「ロビン・レイコフによって語用論的関心事として取り上げられ、リーチによって語用論的『公理』としてまとめられ、B&Lによって、より包括的な理論として体系化されたと言える」。宇佐美 (2008: 15)

語用論の研究領域に位置づけられることが多いが、社会言語学、特に「相互交渉の社会言語学」と重なる部分もある。ポライトネスは日本語の敬意表現のように社会言語学的規範によって義務付けられていて文法の中に組み込まれている現象ではない。

一般に使用されているポライトネスという概念を科学的な言語学の語用論における研究対象として位置づけたのはロビン・レイコフ (1975) で、哲学者ポール・グライス (1975) の協調の原則 (Co-operative Principle) からポライトネス理論を展開している。

人は会話が相手に伝わるように、ある原則に従って会話をし、情報交換をしている。東 (1994) は、理想的な会話には聞き手と話し手が共に従うグライス (1975) の「協調の原則」というルールがあると指摘している。中右 (1998) も、グライス (1975) が現代言語学に深い影響を与えたと述べ、協調の原則 (Co-operative Principle) が、会話をするとき話し手と聞き手の間に働く論じている。そして、レヴィンソン (2007) は、このルールを守ることによって話が相手に明確に伝わると主張している。

協調の原則とは理想的な会話は聞き手と話し手が共に従っている「質の公理」、「関係の公理」、「量の公理」、「様態の公理」という 4 つの格律で構成されている。

図表 1. グライスの協調の原則 (Co-operative Principle)

質の公理 (正直であれ)	嘘だと信じていることを言ってはならない。充分な証拠を欠いていることを言ってはならない。
量の公理 (情報の量を適切にせよ)	必要十分な情報を提供せよ。必要以上に多くの情報を提供してはならない。
関係公理 (内容に関連していることを述べよ)	関係のないことを言ってはならない。
様態の公理 (明確にせよ)	不明瞭な表現を避けよ。いろいろな意味に取れる表現を避けよ。不必要に冗長にすることを避けよ (短くせよ)。順序正しく述べよ。

ただし、重要なのはグライスは上記の公理に従わなければ協調できないと言っているのではない事である。グライスの公理で重視されるべきなのは、話し手はこの公理から逸脱することによって、隠された言外の意味があることを聞き手に合図しているという点である。さらにその意図は明示されてはいないが、発言においては含意があるということが推論でき、聞き手に理解されるという。このように、コンテキストの中で、会話の公理を破ることにより会話に生まれる含蓄が“implicature”という観念である。

レイコフ (1975) は協調の原理を逸脱する意図はポライトネスにあると考え、次の 3 つの規則で成り立っているポライトネスの原理を打ち出した。

図表2. レイコフのポライトネスの原理

規則	聞き手へのかかわり方	戦略
押し付けない	(距離:Distance)	距離をつくれ
選択肢を与える	(敬意:Deference)	敬意をあらわせ
聞き手の気分を良くする	(連帯:Camaraderie)	親愛感をあらわせ

またレイコフはこれら3つのポライトネスの原理は、それぞれの比重は各言語・文化によって異なっている、各言語・文化に普遍的なものであると説明している。

イギリスの言語学者リーチ (1983) もグライスの「協調の原理」から展開しているポライトネス論の先駆者であり、「協調の原理」と共に機能する「丁寧さの原理 (Politeness Principle) を提唱した。リーチのポライトネス原理は次の6つの公理からなる。

図表3. リーチの丁寧さの原理 (Politeness Principle)

(I) 気配りの原則 (Tact Maxim) (行為賦課型と行為拘束型において)	
(a) 他者に対する負担を最小限にせよ	(b) 他者に対する利益を最大限にせよ
(II) 寛大性の原則 (Generosity Maxim) (行為賦課型と行為拘束型において)	
(a) 自己に対する利益を最小限にせよ	(b) 自己に対する負担を最大限にせよ
(III) 是認の原則 (Approbation Maxim) (表出型と断定型において) 417	
(a) 他者の非難を最小限にせよ	(b) 他者の賞賛を最大限にせよ
(IV) 謙遜の原則 (Modesty Maxim) (表出型と断定型において)	
(a) 自己の賞賛を最小限にせよ	(b) 自己の非難を最大限にせよ
(V) 合意の原則 (Agree Maxim) (断定型において)	
(a) 自己と他者との意見の相違を最小限にせよ	(b) 自己と他者との合意を最大限にせよ
(VI) 共感の原則 (Sympathy Maxim) (断定型において)	
(a) 自己と他者との反感を最小限にせよ	(b) 自己と他者との共感を最大限にせよ

Leech (1983 / 池上・河上訳 1987 : 190)

リーチのポライトネス原理について Thomas (1995 / 田中他訳 1998 : 183) は、そのアプローチの弱点を指摘しながらも、異文化比較をしたり、ポライトネスというものの理解とそのストラテジーの使用における文化的相違を説明したりする際には有効であると評価している。

語用論の枠組みのポライトネス理論の中で、一番広く研究に援用されるのは1978年に Brown & Levinson (以下 B&L) に提唱されたフェイスの概念である。実際に論文が広く知られるようになったのは、前述のリーチより後で、1987年の

Penelope Brown and Stefen C. Levinson 著、Politeness: Some Universals in Language Usage 刊行からで、それ以来、社会言語学、語用論、会話分析など様々な分野に影響を及ぼしている。理論の出発点となるのは社会学者ゴフマン (1967) の「フェイス」という概念で、「それは、多くの様々な言語で観察される言語使用に関わる共通現象」(B&L 2011: 3) であると述べている。フェイスとは高度に抽象的な文化的な概念 (同: 12) で、二種類の普遍的な欲求からなるとしている。それはやりとりの参加者が、自分の行為を妨げられたくない、自分の領域に立ち入ってほしくない、邪魔されたくないというというネガティブ・フェイスと、何らかの点で認められたい、他人から賞賛されたい、理解されたいというポジティブ・フェイスの二つである。発話という行為には本質的にフェイス威嚇的 (face threatening) なものがあり、そのために発話行為を和らげる必要があるというのがB&Lの理論の中核となる考えである。

B&Lの理論の一般の枠組みはレイコフとリーチ同様、グライスの会話の含意の理論とそれを生み出す行動指針の枠組みであり、

[...] 重要なのはGriceの提案の核心にある会話とは理にかなった効率のいいものであるという作業的想定 (working assumption) を会話従事者たちが持っていることである。このような想定を背景とすると、ポライトな話し方は行動指針違反となり、その結果、聞き手の側に合理的な説明を要求するのである。[...]

と述べている (B&L 2011: 5)。さらにもう一つの枠組みとして、これもGrice(1971)のコミュニケーションの本質を受け手 (recipient) によって理解されるように企図された特別な種類の意図であるという立場を前提にしていることを挙げている。(同: 10)

B&Lはポライトネスを言語行為において話し手と聞き手の持つフェイスの欲求が脅かされた場合に、そのフェイス侵害を補償するものとしてとらえている。補償のためのストラテジーは、1) あからさまな表現、2) 聞き手のポジティブ・フェイスの欲求に合うポジティブ・ポライトネス、3) 聞き手のネガティブ・フェイスの欲求に合うネガティブ・ポライトネス、4) ほのめかし、5) 明確な要求行為の回避、の五つである (Brown & Levinson 1987: 68f.)。

図表 4. B&Lのポライトネス・ストラテジー

ネガティブ・ポライトネス	ポジティブ・ポライトネス
ストラテジー	ストラテジー
1. 慣習的な間接性に訴える	1. 相手 (の関心・欲求・必要・所有物) に気づき、注意を向ける

2. 質問する・曖昧化する	2. (相手への興味・同意・共感を) 誇張する
3. 悲観視する	3. 相手への関心をより強いものにする
4. 負荷 (Rx) を最小化する	4. 内輪である標しを用いる
5. 敬意を示す	5. 一致を求める
6. 謝罪する	6. 不一致を避ける
7. 自分と相手を非人称化・非個人化・非人格化する	7. 共通基盤を仮定する・喚起する・主張する
8. フェイス侵害行為を一般則として述べる	8. 冗談を言う
9. 名詞化する	9. 相手の欲求についての知識と気遣いを主張しまた仮定する
10. 自分が借りを負うこと・相手に借りを負わせないことを明言する	10. 申し出・約束をする
	11. 楽観視する
	12. 自分と相手の両者を行動に取り込む
	13. 理由を言う (また尋ねる)
	14. 相互的であると見なしました主張する
	15. (物・共感・理解・協力を) 相手に贈与する

滝浦 (2013) p.107, p.110-111による

このようにB&Lのポライトネス論は、もともとは円滑でないコミュニケーションを円滑にしようという、実践的な目的をもった理論であり、日本語でいう「丁寧さ」とは意味合いが異なる概念である。

レイコフ、リーチ、B&Lに代表される初期のポライトネス論はいずれも発話行為 (オースティン 1962) が出発点となっていて、疑問、依頼、命令、約束、警告、忠告、報告、祝福、感謝などの機能を担う行為は本質的にフェイスを脅かすもの (Face Threatening Acts、以下 FTA と略す) であるということ的前提としている。

しかし、様々な問題点が指摘されているにも関わらず、B&Lのポライトネス論がポライトネス研究で今でも引用されているのは、ポライトネスが社会における対人関係の表現の普遍的な構成要素であり、社会生活と社会コミュニティの構築に必須であるとの主張が正当であると認識されているからだと考えられる。

## 2.2 会話分析の視点

会話分析は1960年代に「エスノメソドロジー研究」の一領域として成立した、相互行為の組織の研究で、(西坂 2012) 普段の言語使用に着目したこと、会話には一定の規則があることなどを明らかにしたことなどを特徴とする。

会話分析で重要な概念としては話者交替 (turn-taking)、「隣接ペア」、「選好

(preference) 〕 成員カテゴリー化装置 (membership categorization device) が挙げられる。いずれもレポート・ボライトネスの分析に有効な装置であり、データの中から例を挙ることができる。

話者交替は会話の参加者がいつ、どのタイミング話し手と聞き手という役割を交替しているのかというものを探るもので、会話分析の重要な概念である。一人の話者の発話が次の話者と交代するまでの発話はターンと呼ばれ、会話のターンを構成する単位は Turn constructional unit (TCU) という。次の日本人組の会話例のように、ターンは文とは違い、複数の文で構成されたり、単語や節などで構成されることもある。

#### 例 1. [フェイスブックの自撮りについて]

		(沈黙)
FNG.01	I	すごい載せるよね、自撮り、最近ね。すごいよね。
FNG.02	K	フェイスブックの自撮り率がすごい。
FNG.03	I	ねー
FNG.04	K	半分ぐらいが自撮り。
FNG.05	I	ねー
FNG.06	R	なんか載せたくないけどしょうがなく、みんなで撮ったから載せますみたいな。なんかその、私は別に載せたくないんだけど、ちょっと載せますみたいな /
FNG.07	I	/でも好んで載せる人もいるよね、なんか /
FNG.08	K	/だってどういう気持ちで載せてるのかわけわからん。自分の顔を全世界にさらすわけじゃん。
FNG.09	R	たしかに。
FNG.10	K	言い方悪いけど。
FNG.11	R	たしかに。

また、ターンが交替する時点は Turn relevance place (TRP) と呼ばれ、例のように「よね」「じゃん」などによって標示される場合と、下降イントネーションで発話の終わりを知らせる場合などがあり、いずれも一定の秩序のもとに行われていることが分かる。FNG.06、FNG.07、FNG.08では、IとKが前の発話のわずかな切れ目に割り込んでいるが、IはRの発話に「でも」と付け足すことでターンを取り、KはさらにIのターンに「だって」で付け足しをおこなっている。このように、発話の移行適切場所以外での発言権は turn allocation techniques という規則によって行われる。

成員カテゴリー装置は「性別」「職業」などをカテゴリー化するもので、会話の中で場面によって変わりうる。次にその一例を示す。

## 例2. [日本社会と偏見について]

FNG.01	K	で一、あれやなたしかに。閉鎖的というか、排他的か。
FNG.02	R	いづらいよな。日本の社会
FNG.03	I	たしかに。
FNG.04	K	だから、なに？日本でゆうたら、日本人と外国人というイメージで差別。差別じたいはないねんけど、日本人という種族。自分らとその周り、ていうので差別してるから。
FNG.05	I	ああ、あー。
FNG.06	K	なんやろな。例えば、黒人のイカツおっさんが、電車に乗ってきたとしてさ、座るやん、隣誰も座らんやん
FNG.07	I	座らないねえー
FNG.08	R	俺もね。俺も絶対ね。最後に俺の隣座る。マジマジマジ。(I 笑う)
FNG.09	R	必ず、必ず俺の隣が一番最後。周りみんな座ってんのに、俺のあいてんの。まじで、俺の隣あいてんの。しょうがなく、そこで
FNG.10	K	イキフン(雰囲気)やからな。関係ないんや。
FNG.11	R	外人やから
FNG.12	I	日本、偏見多いよね。多くない？
FNG.13	R	変えたほうがいい。
FNG.14	I	ね。
FNG.15-23		[...]
FNG.24	I	うんうんうん。日本好きだけど、そういうところは好きじゃない。うちさ、電車普通に、座る、横。外人さんでも、むしろ座りたい。

FNG.01~07までは日本人の留学生が自分の国の社会を批判している場面である。ところが、FNG.06のKの発言に、突然Rが反応して、IとKを戸惑わせる。それは、Rが日本人の父親とメキシコ人の母親を持つハーフであるため、自分を「外人」とカテゴリー化したからで、Iは笑うことによって冗談と受け取ったことを表し、Kはそれは雰囲気でのせいで、Rには責任がないと言ってその場をとりなしている。それまではIもKもRを自分たちと同じ成員カテゴリーと考えていたことが分かる。それからしばらく外の話題が続き、FNG.24でIがやっとFNG.06の問いに答えているが、その間のインターアクションを踏まえて、自分を「外国人に偏見を持たない日本人」とカテゴリー化している。

隣接ペアとはAが起こるとBが起こるというペアになっているような発話のことである。隣接ペアには「質問—回答」、「挨拶—挨拶」、「謝罪—受け入れ/拒否」などがある。次の例はN2D.01でTが謝罪をして、N2D.02がそれを受け入れている隣接ペアの例である。

## 例 3. [T が自分が話しすぎていることに気がついて]

N2D.01	T	[...] 分からないけどさあ、まあ、いいかどうか分からないけどね？ うーん じゃ、でもさ、ごめんね、話しすぎて、まあ、なんか、
N2D.02	R	いえいえ、だいじょうぶ。

選好とは好まれる回答/好まれない回答のことで、相手の問いに肯定的に回答するのが「好まれる回答」で、否定は「好まれない回答」となる。特徴として、肯定の場合は簡潔で応答の時間が短く、好まれない回答はその逆で、間接的な緩和表現や、あいまいな表現が使われることが多い。次の例では N3G.03、N1D.02、N1D.08が「好まれない回答」で、N1D.11が好まれる回答となっている。

## 例 4. [C が座談を盛り上げるために話題を提供]

N3G.01	C	日本人、若者は 頭が おかしい！
		(沈黙)
N3G.02	C	(Tbに向かって) そうでしょう？
N3G.03	Tb	ううん、なんか、おかしい人は会った事ないので ( ? )

## 例 5. [日本の食べ物の好き嫌いについて]

N1D.01	F	ウニは？
N1D.02	K	ウニなんて、いやあ (低く笑う)
N1D.03	F	じゃ、日本でも食べなかった？
N1D.04	K	(首を横に振る)
N1D.05	F	わたし、食べたけど、後悔した。食べなければよかった。(苦笑い)
N1D.06	K	あまりおいしくない？ どういう ((ジェスチャー)) 口ざわり
N1D.07	F	なんか、記憶に残らないぐらいまずかった。でも、なんかみそとか、かにみそとか...
N1D.08	K	いや、まあ、食べないことはないけど...
N1D.09	F	あと /
N1D.10	K	/いくら。いくら食べる？
N1D.11	F	平気だよ。大好きなんだ。

## 3. データの概要

## 3.1 資料

資料は2014年と2015年に録音・録画した5つの会話からなる。ブラジル人2名ずつによる2つの対話と4名による座談、日本人は2名による対話と3名のダ

ループによる座談である。

ブラジルグループの選考にあたっては、ブラジルポルトガル語を母語とするブラジル人で、日本滞在の経験があり、日本語能力試験N1・N2・N3を取得していることを基準とした。対話をしたのは日本滞在歴16年と5年の日本語能力超級ペアと、日本へそれぞれ1年間の学部留学をした日本語能力試験N1レベルのペア（全員男性）、それに日本語能力試験N2およびN3取得者で学部留学経験者3名、自費短期留学2回1名の女性3名・男性1名のグループである。

日本人グループは全員、日本語を母語として日本の大学でポルトガル語を専攻し、ブラジルに1年間の語学留学をしている交換留学生である。ブラジルで初めて知り合った者同士であるが、同じ寮に住んで、同じ授業を取っているため、毎日会話をしている。グループ分けは、所属大学が違う女性2名（関東地方出身）のペアと男性2名、女性1名のグループ（2名関東地方出身、1名関西地方出身）とした。

収集の場は大学の構内の研究室と寮の図書室でビデオカメラとノートパソコンで録画アプリケーションを使って行われた。

参加者には研究のための会話データ採集ということだけ前もって伝え、研究の詳細は知らせなかった。テーマは与えず、「何でも自由に話してください。」という指示に留めた。

採集データのうち、分析に使われたのは各組とも最初の30分である。

データ記述は漢字仮名混じり文で示す。

各グループの示し方は次のようにする。

FN = 日本語ネイティブ話者、FND = 同ペアグループ、FNG = 同3人組グループ

N1D = 日本語能力超級

N2D = 日本語能力上級

N3G = 日本語能力中級

プライバシー保護のため、グループ内の話者はアルファベットで示す。会話中の固有名詞も同様に扱う。

参加者（年齢・性別・職業・日本滞在期間）

グループ名	収録時間	年齢層	イニシアル /性別	職業	日本滞在歴	備考
N2D 上級ペア	60分	25-30	T (m)	日本語教師	6週間 1年間	訪日2回
			R (m)	学生	1年間	13歳から語学学校で日本語を学習

N3G 中級グループ	90分	20-25	C (f)	学生	5 か月間	訪日 2 回 私費留学
			Tb (f)	教師	1 年間	-
			CR (f)	日本語教師	1 年間	-
			L (m)	学生 (院)	1 年間	-
N1D. 超級ペア	90分	35-45	F (m)	日本語教師	1 年間 4 年間	訪日 2 回
			K (m)	日本語教師	17年間	
N1G	60 分	30-35	文字化無し			
FND 母語話者ペア	30 分	20-25	H (f)	学生		
			Y (f)	学生		
FNG 母語話者 グループ	30分	20-25	W (m)	学生		
			I (f)	学生		
			Z (m)	学生		

#### 4. 考察

記号の原則は佐々木 (1994) を一部変更したもので、以下の通りである。

- (1) 言語音だけではなく、一部の非言語 (うなづき、特に目立つジェスチャー、笑い声等) も ( ) 内に記した。
- (2) 発話文の認定は一人のターンが次の話者に交代するまでとした。ターン継続中に聞き手が発する感嘆詞、応答詞などは、ターン交代が起こらない場合はあいづちとする。
- (3) 重なり発話は重なり部分とそろえて、下に { } で示す。
- (4) 聞き取れない箇所は (?) で示す。
- (5) 笑い声は (笑) で示す。声のない笑いは特に文脈情報に示さない限り記さない。
- (6) 文末は下降調は「。」上昇調は「?」で示す。
- (7) 文脈情報は ( ) で示す。
- (8) ターンへの割り込みは / / で示す。
- (9) 長い沈黙は (沈黙) で示し、短い沈黙は ... で示す。

#### スタイルシフト

まず母語話者と非母語話者の会話スタイルで特に目立ったのはスタイルシフトである。日本人グループは文体面でも語彙面でもカジュアルなスタイルで一貫して、稀に敬体へシフトするときは何らかの効果を狙っての戦略であると解釈できる。非母語話者グループは日本語能力中級の場合は社会言語学的ス

キルの未習得が原因と思われるスタイルシフトの混合が多く見られた。超級・上級ではストラテジーとしての敬体使用が現れているが、断定や否定回答を和らげる効果を目的とする例が多かった。これはポライトネスを丁寧と同義に解釈していることの表れだと考えられる。また、語彙としては男性の自称詞を表す呼称の使い方にも上級の非母語話者間に揺れが認められた。まず、超級ではFは「わたし」、Kは「ぼく」と固定していたのに対して、上級では「わたし・おれ・ぼく・自分」が無差別に使われていた。また、母語話者に多く出現した「タメ口」は非母語話者にはほとんど使われていないが、これは移り変わりが激しく、何が定着するかが分からないため、外国で日本語を学習している者にとっては、習得が難しいものと考えられる。

次に敬体を言語形式緩和のストラテジーとして使用している例を取り上げる。

#### 例6. [日本語学習に使った金額について]

N2D.01	R	そうね、私は8年間、M校で、卒業した。
N2D.02	T	8年間... 8年!ですか。
N2D.03	R	(笑い)
N2D.04	T	いくらかったか、計算した?
N2D.05	R	高い。
N2D.06	T	ちょっとね、ちょっとプライベートな話だけど、高い!高いと思う。
N2D.07	R	そうそうそう(うなずき)わたしも、そう思う。だんだんね、高くなった。

Rは13歳からM校で日本語を勉強して卒業まで8年間通学したという話を聞いて、M校は月謝が高いことで知られているため、Tが驚きを表している。しかし、相手の経済状態に踏み込むのは、ネガティブ・フェイスを脅かすことになるので、「ですか」を使って緩和を試みているケースである。

表1. 各グループによる常体と敬体の使用

グループ	常体	敬体	言い切り中止	合計
N3G	199 (68%)	67 (23%)	26 (9%)	292 (100%)
N2D	189 (73%)	37 (14.3%)	33 (12.7%)	259 (100%)
N1D	133 (80%)	17 (10%)	17 (10%)	167 (100%)
FND	232 (79%)	9 (3%)	54 (18%)	295 (100%)
FNG	201 (77%)	3 (1.1%)	57 (21.9)	261 (100%)

常体と敬体は必ずしも混合とは言えない場合もある。例えば、上級グループは座談を「自己紹介」で始めることにしたので、最初は敬体を使っているし、途中で何回か収録者(不在)に敬体で話しかけている。

表 2. 自称詞の使い分け

グループ	わたし	ぼく	おれ	自分	あたし
N2D (男性)	18	12	5	29	0
N1D (男性)	37	18	0	0	0
FND (女性)	24	0	0	15	0
FNG (男 2・女 1)	0	0	4	10	12

例 7. [K が話題を提案して F が話し始める]

N1D.1	K	じゃ、日本でイライラした時、どういう時でした？
N1D.2	F	ううん、いろいろな時、あったんですけどね。
N1D.3	K	はい。
N1D.4	F	あのう、たとえば... そうだね。あのう、まあ、最初の経験だけど... まあ、 (うん) まだ日本のマナーとか知らない状態だったので... あのう、道を / の案内を頼もうとしたとき... あのう、「すみません。どこですか。」とか... だけど、その「すみません」で人がこっちに向けて注意をするって... タイミングを忘れて... (はい) つい聞いてしまったので... そこへ通ってたおじさんが、なんか... 見ながら通り過ぎて、だから / (うん)
N1D.5	K	/無視されたんだ /
N1D.6	F	/無視されたと、いや、無視されたと言えない。ジッと目を見てたから... (笑い声)
N1D.7	K	だから、それは /
N1D.8	F	/避けてた。もう一つは、田舎に住んでたころ、あの... おばさんに道を聞こうと /
N1D.9	K	田舎と言っても N /
N1D.10	F	J市は田舎、田舎です。
N1D.11	K	はい。
N1D.12	F	で、そこでおばさんが... おばさんに道を聞こうとしたら... 丁寧に「すみません。大学どこですか。」とか聞こうとしたら... そのおばさんが... 凍りついて... (低い笑い声) 「あのう」で一歩、二歩ぐらいさがって... 「いやあ、そのう...」で逃げちゃった。
N1D.13	K	まあ、イライラしちゃうですね。

T と K は会話を始めるにあたってまず敬体を使っているが、F はすぐに常体にシフトする。それで K も N1D.5 で常体でコメントを挟んでいる。しかし、

N1D.10でFが再び敬体に戻ったことから、次の発話を敬体に戻している。このように日本語の常体と敬体の使い分けは非母語話者にとって難しいものである。次の例は上級ペアが会話を始めるにあたって敬体にするのか常態にするのかを交渉しているケースである。

例8 [会話を敬体にするか常体にするかの相談]

N2D.01	T	じゃ、ちょっと、自己紹介... ぐらいからいくかなと思ってるけど
N2D.02	R	はい (うなずき)
N2D.03	T	ちょ、ちょっと聞くけどさあ、「です、ます」? それとも... 普通体、どっちにする?
N2D.04	R	私もそれについて考えてた。(笑顔で)
N2D.05	T	わかんないけど
N2D.06	R	普通体でいいよ... いいかな
N2D.07	T	ちょっとやってみ (?) ((ジェスチャー)) かな?
N2D.08	R	うん ((うなずき))
N2D.09	T	じゃあ、それでいい。(それに) します。(Rではなく、カメラに向かって) じゃ、オーケー。

しかし、この後、「自己紹介」をすることになったので、二人はまた敬体に戻り、次の話題に切り替えるとき、敬体が常体かを再確認している。

例9. [常体が敬体かの再確認]

N2D.01	T	じゃあ... そして... どうして日本語を勉強し始めたんですか... これからね... 普通体... ですよ。
N2D.02	R	そうだね。普通体で話し手みよかな。

あいづち

あいづちにはN1D、N2DとFNDの3つのペアグループのデータを分析にした。最初の30分で出現したあいづちは表のとおりであるが、表3にあるようにN2Dでは他の2グループと比較して、うなずきが圧倒的に多かった。

表3—グループ別のあいづち数 表3—うなずき

グループ	回数	うなずきの回数			
		音声なし	音声あり	合計	全体に占める割合
N2D	247				
N1D	266				
FND	250				
N2D		121	12	133	49%/53.8%
N1D		18	2	20	6.7%/7.5%
FND		20	29	49	8.0%/19.6%

なお、全グループに共通して使われたあいづちを表 4 に示す。

表 4-3 グループ共通のあいづち

あいづち	N2D	N1D	FND
うん、うん、うんうん	31 (12.5%)	68 (25.6%)	114 (45.6%)
あ、ああ	12	16	33
そう、そうそう、そうそうそう	17	9	12
笑い声	6	59	7
はい、はいはい	6	9	2

例 10 [日本語学習歴について]

N2D.01	R	十三の時は日本語を勉強はじめてけど、あのう、この日本語を勉強したい意志はもう前/ / (なるほど)
N2D.02	T	で、どこではじめたんか？
N2D.03	R	あ、M校/ /あ、なるほど。
N2D.04	T	で、ずうっとそこでやっていて、そして入学してから、そことこちらと同時に？ やってた？
N2D.05	R	そうね。なんか、わたしは 8 年間 M 校で、卒業した、実は (は、はちねんかん！)

N2D.01のTのあいづちは相手の言っていることを理解したという合図ではなく、ターンを取るための手段になっている。「なるほど」でRの発話の流れを止め、N2D.02でターンの交替が行われている。なお、ここでは動詞の常体にプラス「の(ん)」に疑問詞「か」をつけて質問しているため、Rは「あ」で違和感を示し、M校と答えている。このような常体の形式は母語話者の男性に使用例がなく、乱暴に聞こえるのでラポール低下の要因となる。「あ」のもう一つの解釈としてTはRがM校で勉強したことを知っていて質問したことにもよるものと考えられる。次のTの「あ、なるほど」はTがすでにRが勉強したのはM校だと知っているの、場面からすれば「あ」は適切とはいえず、「なるほど」も前のあいづち同様、ターンを取るために発せられたものであることがN2D.02で分かる。結局、Tの到達目標はどこではじめたのかを知ることはないということとは明らかかなではあるが、その先にあるものが見えないので、Rは次の質問の回答にも「なんか」「実は」を使用して慎重になっている。このようなTのあいづちは一方の会話の促進にしかならないので、レポートは生まれてこない。

次に母語話者のあいづちの例を示す。



N2D.12	R	<p>いろいろな生徒は「ああ、日本語、なんか、習いたいけど、先生になりたいくないという  ( )  ほくのほうは、それになりたかったので、  いつもあるでしょう  分かんないけどいつもあるね。 全然...問題がなかった。 なるほど</p>
N2D.13	T	<p>うーん。そうだね。なんか、正直に言えば、入学したときにね、日本語はほんとにゼロっていうレベルだったからさあ、分かんないけどさあ、ほんとにねえ、自分のクラスににじゅう...人?25人?、分かんないけど、それぐらいの人数がいて、ええと、日系人は5人、かな?で、その5人かな?わかんないけど、二人はほんとになんか、自然に話せる、えー、日系人だったからあ、ちょっと、なんか、自分はね、「あ、自信があまりないかなあ」と思って、何回も、「ああ、やめよう、やめよう」と思って、けっきょく、 ( )  そう。  (ああ、その影響だった?) けっきょく、ま、やっぱりね、ほんとによ、大学のときにほんとに、日本語は夢中だったから、勉強続けようとしていた、ね?なんか、ことで、なんか、今のレベルになったと思ってるけどさあ、( )それは... わかる ね、今、UIでやってるからさ、だけど、昔に、大学で教えたことがあるね。(聞き手を指差しながら) ねえ、教えたことがあるでしょう? で、その時に、 はい 「えっ?高いレベルの人たちはちょっと、低いレベルの人たちにちょっと、悪い影響...があると思う...ちょっとプレッシャーかかる、かかっていると思うね。理由はよく分からんけどさ。</p>
N2D.14	R	<p>(...でも) なんていうかな、言ってることは分かるね。わたしも、M校にいた時にも、ある、同じレベルだけど、すごく、日本語はもうペラペラの人がいたから、うーん、その影響もあるけど、でも、反対の影響もあるでしょ? なんか...たとえば、あるクラスで、みんなおんなじレベルだけど、ある人はもっと強くなってる (こともあるけど)。あー、ほかの人たちは同じようにもっと強くなりたいと  ( )  /  な、なるほど!!</p>
		/そういうこともあるけどさあ、[...]

N2D.03のTの場合は直接的な表現を避け、間接的であいまいな言い方をしているがRはTが何を言いたいのか判断しかねて、戸惑っている。結局、自分で解釈して返答を試みるが、N2D.13で相づち的に「ああ、その影響だった。」と自分の判断が間違っていたことに気がついている。Tは発話に「まあ、なんか(3回)、けっこう長い、えーと、やっぱりね、ちょっと」のフィラーや婉曲表現を使用して自分が伝えたいことをぼかしているため、相手は具体的な内容が何であるのかをN2D.3で聞いているが、それに対してもTは「なんか、やっぱり」で応答している。このように相手の意図が明確でない表現は聞き手を不安定にしたり、不信感を抱かせる結果にもなりかねない。日本ではあいまいな表現が好まれるとよく言われるが、それは対話者同士が同じ社会的背景を共有してこそ理解可能であり、「態度」と「伝達内容」のバランスが崩れるとコミュニケーションに支障を

きたすことが現れている。Tは自分が日本語をゼロから学習して、大学の臨時教員や、現在は大学の公開講座の教師であること、そしてそこまで到達するのにいかにがんばって来たかについて話したいが、それはリーチの「自分への賞賛を最小限にせよ」という「謙遜の原則」に反するため、間接的に表現するストラテジーを選んだものと思われる。

RはTの主張に反対の意見を述べているが、まず「言ってる事はわかるね」と同調の意を表し、直接反論することなく「うーん、その影響もあるけど、でも、反対の影響もあるでしょ？」と質問形式で、回答を相手に委ねるというストラテジーを選び、ラポートを損ねることなく、「あ、なるほど」「そういうこともあるけどさあ」という答えをTから引き出し、会話を成功に導いている。

このように相手と反対の意見や、相手が言った事を否定するストラテジーにも母語者と非母語者では次の例のような違いが現れている。

#### 例13 【日本でイライラしたこと】

N1D.5	K	/無視されたんだ/
N1D.6	F	/無視されたと、いや、無視されたと言えない。ジッと目を見てたから... (笑い)
N1D.7	K	だから、それは/
N1D.8	F	/避けてた。もう一つは、田舎に住んでたころ、あの...おばさんに道を聞こうと/
N1D.9	K	田舎と言ってもN/
N1D.10	F	J市は田舎、田舎です。
N1D.11	K	はい。

N1D.6でFはTの発言に否定はしているが、その理由をユーモアで紛らわせ、Kの笑いを取ることでラポートを維持している。ポジティブ・ポライトネスのストラテジーである「不一致を避ける」に違反しても、同じくポジティブ・ポライトネスのストラテジーである「冗談を言う」ことによってフェイスの侵害を避けることができた。しかし、続くN1D.8でJ市を田舎と言って、それを訂正しようとしたKにあからさまに「J市は田舎、田舎です。」と断言して、Kに反論している。ここで注目されるのは、それまで常体で話していたのを敬体にシフトしたことである。丁寧に表現することによって、否定を緩和させる試みるというストラテジーは他の非母語話者の会話にも現れていることから、非母語話者特有のストラテジーといえるであろう。この場合、一般に反対するときは発話が間接的になるという法則に従わなかったのは、簡潔に言うことによってターン保持を図ったものとみられる。しかし、Kの反応は「はい」のみであり、Fと同じ敬体を使うことによって、相手と距離を置いている。ここでは親しさを生むラポートは現

れていない。

例14 [時差ぼけ]

FND.01	H	だって、うちらが来る前にさ、食事抜いてたんでしょ。一個
FND.02	Y	抜いてたっていうか、その時差ぼけ、ボケボケで食べれなかったっていうのも (ううん) あるし、そのなんか、なにがあるっていうのも分からないし、しかも、野郎二 (うん) 人の中で (...) 男の子の部屋にも入れないし、 (ああ)

例15 [ブラジル人の性格]

FND.01	H	ブラジル人は正直じゃん。例えばさ、きのう... 会った時に「Oi」って言うって うん るように思えたのに (笑顔で手をあげるジェスチャー) (...) のに、次に会った時に (...) (ジェスチャー) するじゃない? わたしなんかしたかな? 嫌われたかな? って考えちゃったんだけど 今もう分かるじゃない? (ふつうに疲れ (笑い) うん てるなって ... けど、日本だったら、なんかぜったいそんなこと ( ) な うーん い? なんか、人と会うとき常にテンション保つし、隠すじゃない、自分が疲れ (うん) てることあたりまえってことあるじゃん。けど、ブラジル人それがないじゃん、 (ね?) (うん) それが。思い切り機嫌悪い (...) それはいいか悪いかわからないけど、分かりやすい (ああーっ) ことは分かりやすいけど。傷、日本人からしたら傷つかない? ちょっと。
FND.02	Y	(...) 性格が、なんか、つめたいっていうのは傷つくけど、私もわりと、けっこう、うーん、顔に出る人なのでお腹空いたときとか、寝るときに、逆になんか似てるせいで... 日本より、なんか、過ごしやすいなあっていうのが... (うん+うなずき) (うん) ちょっとあるな。 (ああー)

例16 [フェイスブックに写真を載せる人について]

FNG.01	R	なんか載せたくないけどしょうがなく、みんなで撮ったから載せますみたいなの。なんかその、私は別に載せたくないんだけど、ちょっと載せますみたいなの /
FNG.02	I	/でも好んで載せる人もいるよね、なんか。
FNG.03	K	だってどういう気持ちで載せてるのかわけわからん。自分の顔を全世界にさらすわけじゃん。

母語話者の会話では、「～ってどうか」といういわゆる「若者言葉」で受け、反論ではなく、言い換えの形で実際はどうであったかを説明している。次の例では、相手の言った一部に同調しておいて、それから相手と違った考え方を述べている。いずれも、直接否定することは回避され、レポートの低下は起こっていない。また、FNGでは、Rは「載せたくないけど載せる」、Iは「載せたくて載せる」、Kは「どういう気持ちで載せるか分からん」と三人三様の意見が出ているが、相手のターンを「でも」「だって」で続けることによって、一続きの流れになって、否定意見が緩和されている。

### 確認用法

確認用法とは「話し手が自分の判断について相手の確認を求める」(国立国語研究所 1960:109)用法のことである。

日本の大学生の会話には頻繁に現れるが、非母語話者の会話にはほとんど使われないのが文末の「じゃん」と間投詞の「さ」である。これは非母語話者によっては「じゃない」または「でしょ・だろう」と「ね」で代用されると考えられる。なお、確認用法にはそれ以外にも「よね」があるので、これも一緒に扱う。

大浜(2006)は確認用法の機能を「対話調整機能」と呼び、「会話は会話者双方による共同行為であり、その進行に関して予め確実な予測ができない、それ故に会話間で常に情報の共有状態を保持する必要がある。そのことに貢献するの発話機能が「対話調整機能」である。(大浜 2006: 108)と説明している。

文中、文頭に使用される「ね」については、文中の「ね」は発話内容の処理が聞き手に大きな負担がかかることを考慮し、少しずつ小分けにして提示しているとし、聞き手の見込みに応じて使用数は異なるであろうと予想している。そして、その見込みをあまり低く見積もりすぎると「の」頻度が高くなり、幼い感を与え、逆に頻度が低すぎると、共通の基盤作りであるという意志表示が相手に伝わりにくくなるとしている。文頭の「ね」には聞き手に共通の基盤づくりの準備を促す機能があり、単独に使用される「ね」は会話の相手が作り出そうとしている基盤に同意、了解するものだと述べている(大浜 2006: 124)

表5 確認用法の使用の実態

	N2D	N1D	FND	FNG
ね	137	53	55	79
じゃん	2	0	29	24
でしょ	7	6	6	8
じゃない	3	2	16	3
でしょう	3	9	0	0
よね	4	3	4	24
さ、さあ	19	3	30	43
	175	76	140	181

非母語話者のペアは上級では「ね」の使用が多すぎるため、聞き手は煩わしさを感じる事が予想される。超級は他のグループに比べて確認用法の頻度が約半数かそれ以下であり、情報の共有に関する意識の高さを感じられない。また、母語話者グループには見られない「でしょう」の使用は、話し言葉では「だろう」が確認用法機能として使われなくなり、その代わりに「でしょ」が常体として使用されるようになっているが、非母語話者には敬体の「でしょう」と常体の「でしょ」の区別が認識されていないものと考えられる。

## 5. おわりに

本研究では日本語に関するデータを取って、それを分析するという方法で日本語非母語話者の日本語会話に現れる（イン）ポライトネスの実態を考察した。まだ限られたデータであるが、非母語話者のコミュニケーションスタイルが共話的会話よりも情報伝達重視的の対話的であることが分かった。結果として、話し手と聞き手という役割分担になっていて、両者がインターアクションによって一つの談話を作り上げていくという姿勢は見られなかった。これは接触場面で日本人と良い人間関係を構築するにはネガティブな要素となる。

ポライトネスという現象は普遍的なものであるが、国によって社会によって基準が異なり、外国で習得するのはかなり難しいといえるだろう。日本語を外国語として学習したブラジル人は敬体は丁寧な言い方という意識があるために、ポライトであろうとして敬体を使用する。その結果、対話者との間に距離ができ、友好な人間関係が構築できない。また、大学ではじめて日本語に接すると、自称詞は「わたし」だと教えられ、常体を基盤とする会話においてもそれを変えることに抵抗を感じる。今回のデータ収集のとき、常体使用に自信がないという声が日本語能力上級と中級レベルの協力者の両グループから聞かれた。

グローバル化が急速に進む現代、ブラジルの日本語教育では学習者にとって、理論と実践とのバランスのとれた教授法、実践で役立つ教授法が求められている。

## 参考文献

- 季徳奉 (2002) 「総合的日本語教育の時代に向けて」『総合的日本語教育を求めて』国書刊行会 pp.11-17
- 宇佐美まゆみ (2008) 「ポライトネス理論研究のフロンティアーポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論—」『社会言語科学』11 (1) pp.4-22
- 大浜るい子 (2006) 『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究5』漢水社
- 国立国語研究所 (1960) 「話し言葉の文型 (1) —対話資料による研究」秀英出版
- 佐々木倫子 (1994) 「会話スタイルとラポート—日英・若い女性の座談例から—」『国立国語研究所報告107 研究報告集15』 pp.251-286
- スベンサー・オーティアー、ヘレン (2004) 『異文化理解の語用論』田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・

- 熊野真理訳、研究社（原典：Spencer-Oatey, Hellen 2000）
- 滝浦真人（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店
- トマス・ジェニー（1998）『語用論入門 一話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』（田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理訳）研究社
- 中右, M., 赤塚, N. & 坪本, A. (1998). 『モダリティと発話行為』研究社
- 西坂仰（訳者）（2012）『会話分析基本論集』世界思想社
- 東, S. (1994) 『丁寧な英語・失礼な英語—英語のポライトネス・ストラテジー—』研究社
- 松山洋一（1990）『「伝える言語」「表す言語」考序説 一文章の分類—』國學院大學栃木短期大學紀要 第24号 17-41
- Austin, John L. (1962) "Performatif-Constatif," in *Cahiers de Royaumont, Philosophie No. IV, La Philosophie Analytique*, Les Editions de Minuit.
- Brown, G. and Yule, G. (1983) *Discourse analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Vol.4. Cambridge University Press.
- Goffman, Erving (1967) *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. Anchor Books
- Grice, H. Paul (1971) "Intention and Uncertainty", *Proceedings of the British Academy*, pp.263-279.
- Grice, H. Paul (1975) "Logic and Conversation," *Syntax and Semantics*, vol.3 edited by P. Coke and J. Morgan, Academic Press. pp.22-40.
- Lakoff, Robin (1973) "The logic of politeness or minding your P's and Q's". *Chicago Linguistic Society*, 9. p.292-305.
- Leech, Geoffrey N. (1983/池上・河上訳 1987: 190), *Principles of Pragmatics*, London: Longman.
- Levinson Stephen C. (1983, 2007) *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- Thomas, Jenny (1995) *Meaning in Interaction: An Introduction of Pragmatics*, London: Longman.